

---

# 睡魔を誘う暖かいとある朝

黒川九夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

睡魔を誘つ暖かいとある朝

### 【Zコード】

Z0122Q

### 【作者名】

黒川九夜

### 【あらすじ】

何気ないいつもの日常。それが壊され非日常に。それでも適応した静観、楽觀主義の主人公をお楽しみください（？）

(前書き)

ジャンルがわかりませんでした（爆  
ファンタジーかSFで迷いましたがわからなかつたのでとりあえ  
ずファンタジーへ。なんだかごめんなさい（・・・；  
かんけーないぜ！知らないいつ！ドマイW みたいな人はドゾー（  
あ

睡魔を誘う暖かい朝。俺は通学に使う電車にいつもより乗ろうとして、嫌な予感がして一瞬固まる。

「きやつ」

すると、後ろの人人が俺にぶつかってきた。というか、電車待ちで並んでるのに止まつたらぶつかるに決まっている。聞こえるかわからぬくらいの声で一言謝り急いで電車に乗る。そして、さつきの嫌な予感は気のせいだったと決めるど、心地よい睡魔がまた襲ってくる。

「…いつも通りつまらない一日かな」

さうつぶやき田を瞑ると、睡魔に身をゆだねる。すると、突然体は宙を舞う。何が起きたのかまったくわからないが、視界の端にほんの一瞬、一人の女の子と田が合つ。田が合つと同時に、衝撃と轟音が俺の体だと車内を貫いた。

俺は気がつくと、真っ白な空間に居た。本当に真っ白としか、言いつのない空間。雪山で起きると聞くホワイトアウトといつ現象と、同じ状態が田の前に広がっていた。

「…！」

俺はやつきまで、電車の中にいたはず……あ、でも体が飛んだから……などと混乱状態にある頭を落ち着かせつつ状況整理をしていると、不意に背後から声がかかった

「もしもーし」

「…？」

びっくりして飛びのく。田の前に居るのは見たことのない女性……といつよりは少女のほうが合っている気がする。

「あ、驚かせてしましたか」

「ああ…大丈夫。それよりここはどこですか?…………俺は死にましたか?」

少女は一拍おいて、それでは一つずつ答えていきますね。と丁寧に答えた。

「まず一つ目、ここはただ選択するためだけの場所で特に意味はないのですが、強いて言うのなら現世とあの世の狭間みたいな感じです。では二つ目、あなたはさきほど電車の脱輪事故で一度死にました。」

『死にました。』という少女の言葉が胸に刺さる。大したダメージは無かったのだけれども。でも、やっぱり脱輪事故だったんだなあ…とか思いつつも少女の言葉を聞く。

「だから、あなたはここにいるのです」

少女は両手に小さな拳を作つて、俺の目を見据える。正直これだけじゃ、状況を整理しようにも難しい。

「死んだからここにいる…って意味がよくわからないだが」「あ…少し省いてしまいましたね。ここは選択する場所だと言いましたよね?」

その問いに、ああ…と相槌を打つ

「ではその選択を…聞きます。あなたは生き返るチャンスが欲しいですか?」

俺は少女の言葉を聞き、生き返りたい、と即答できなかつた。信じられなかつたとか驚いていてではなく、だ。もし万が一生き返つても、俺にはやりたいことが見当たらなかつたからだ。それなら死んでしまうのもいいかもしない…。

「どうしたのですか?あ、まだ記憶に混乱とか状況についてこれでないとか、ありますか?」

いつの間にかうつむいていた俺の顔を心配そうに覗き込んでいた少女。その少女に俺はせっかくだけど生き返らなくていい、と伝えるために、息を軽く吸うと目が合つた。その刹那、俺が死ぬ直前の記憶を思い出す。そしてなぜか、死んだ後の自分の姿も写る。そし

て俺は、こうはっきりと少女に伝えた。

「生き返りたい。生き返させてくれ」

そう言つたあと、目の前の少女も聞き取れないくらい小さな声でボソッと呟く。何で俺は忘れていたんだろう…と。

俺は少女に手を握られ、何でもはぐれたら見つけるのが大変だからとか言いぐるめられ、白い空間を歩いていると、突然目の前がただでさえ白いのに更に白く光り思わず目を瞑る。次に目を開けるとそこはよく知つている、というか生まれ育つた町だった。

「あれ、ここは…」

「はい。あなたがさつきまでいた町です。正確にはあなたが事故死したのが現世で、今私たちが居るのは仮の世とか呼ばれるそうです」少女は平然と補足説明をしてくれるが、そんなのは俺の耳には入らない。俺は驚くのを通りこし、もう訳がわからない。誰か俺にどうやつたらこうなるのか、説明してくれ。軽いパニック状態にある俺をよそに、少女は綺麗な夕日ですねーとか言つているけど、俺の耳にはやつぱり届いていない。やつと俺の状態に気がついた少女が、心配そうに言葉をかける

「えっと、大丈夫ですか？」

「…たぶん…大丈夫」

少女はアハハと笑うと、両手を少々物足りない胸のあたりであわせ明るい声で続ける。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は梨菜<sup>リナ</sup>とります。あなたの名前を念のため…」

きつとその後に『教えてください』とか続いたんだらう。しかし間が悪く、俺の腹の虫がグーと邪魔をした。

「…とりあえず、なんか食べない？腹、鳴っちゃったし」

リナと名乗った少女は可愛い笑顔を浮かべ、元気な返事をしてくれた。

夕食には少々早かつたので、色々と話を聞きながら、どこにでもあるファーストフード店で軽く食べ、あとは家でしっかりと食べることにした。

「初めてって話だつたけど…そんなによかつた？」

リナは白い空間にずっと居たわけではなく、しつかりとした住居地があり、そこに住んでいたらしい。その自分の居たところには、ファーストフード店が無くて新鮮だつたらしく、リナはハンバーガーを食べてからとつても上機嫌だつた。

「はい！とつても美味しかつたですよ！お肉とお野菜にソースをかけてパンではさんだだけなのに、なんであんなに美味しいんじょうかね！」

と、さつきからずーっとハンバーガーを褒めちぎつてゐるワケだが。あ、鼻歌まじりにクルクルと回り始めた。…ハンバーガー一つで、そんなに幸せになれるのが羨ましい。皮肉ではなく本当に。そんなふうに思いながら彼女の仕草を眺めていると、不意にリナがぴたつと止まり、路地裏を見つめる。見つめるその顔は、少し青ざめているように見えた。

「どうしたの？」

片手を口元に持つていき、さっきまでの元気がウソのように弱々しく、あれ…と路地裏を指差す。そこには一、三人で一人を殴つている絵ができていた。いわゆるリンチかカツアゲだろう。この辺だとちょこちょこ見かけるのだが、始めて来た少女にはキツイ光景だった。

「…つーあまり見ないほうがいいよ」

とつさにこれ以上は見せまいと、リナの肩をつかみ有無を言わさずに歩き始める。少女の肩は、唇は、全身は、小刻みに震えていて目の焦点も合つていなかつた。その姿を見て、自分の不注意を殴りたくなつた。俺はその時、気がつかなかつた。グループの一人が口

元に不適な笑みを浮かべ、こちらを見ていたことに。

「ついたよ」

あれからほとんどの口を開くことも無く歩き続け、気がつけば家の前。しかし、少し様子がおかしい。四人家族で必ず人が居るとは言えないにしても、もうあたりは暗くなっている。けれど、家には明かりの一つもついていない。人の気配すら、感じられなかつた。まだ誰も帰つてきてないだけだろう。少女一人連れてきたわけだし、事情を話すと長く…あれ、SFとかファンタジーの域じゃん。どうすんだよ…。とか不安になりつつも、力ギを開け家に入る。一階建ての借家は四人で暮らすのに最低限の広さはあるものの、割りと年期が入つているのでお世辞にも綺麗とは言いがたい。

「リナ？ 大丈夫？」

「あ…はい。大丈夫です。その…お邪魔します…」

口では大丈夫と言つてはいるがその声は小さく弱々しい。いや、尾を引きすぎだろ…全然大丈夫じゃないな…。リナの心配をしつつも、とりあえずリビングに案内しようとした時、携帯が鳴る。

『一人暮らしあり年と半分が過ぎましたね。一時はどうなることかと心配していましたが、無事にここまでこれて安心しています。いつものように仕送りを入れておいたので、確認しておいてください。母より』

という文末にあるように、お母さんからのメールだった。あれ?一人暮らし?仕送り?ええ!? 昨日までは確かに四人家族で暮らしていたのに…あれ。いつの間に俺一人になつたんだ!/?あれええ!/? 本日3回目のパニック。それに割と早く気がついてくれたリナは、携帯の本文を見て、あれ?一人暮らしだつたのですか?と聞いてくる。俺は四人のはずです、と即答してお母さんに電話しようとしたアドレス帳を開いたが。

「あ、待つてください」

リナに止められる。

「たぶん一人暮らしと並べになつてるのは、少しずれたからだと思います」

「それ？」

「簡単に説明すると、ゲームとかで出てくるバグのようなものです。これくらいなら特に気にする必要は無いかと」確かにこれはこれでいいかもしない。家族と距離が多少離れたところで、今は何の問題も無い。リナも居るし、面倒な説明もしなくていい。心配なことがあるとすれば…。

「夕飯どうしようか？」

その言葉に、リナは驚いた顔をしていた。

「今回は適応が早いですね。あ、料理は好きでやっていたので、私が作ります。というか食べ物ばかりですね」

そう言って微笑む。久々に、と言つても一十分そこらだが。リナの笑つた顔を見た気がする。

「時間がある時は、しっかり食べるって決めてるんだよ」

「いい心がけですね」

リナは笑い続けながら、台所お借りしますねー、と家の奥へ入つていく。それに軽い返事をする。あ、でも…冷蔵庫に食材があるんだろうか…？

奇跡的に食材が死んでない状態で冷蔵庫に入つていて、美味しい夕飯を楽しめた。リナイわく、簡単な牛肉の炒め物とポテトサラダらしい。食べた後に、風呂に入つてさつさと上がる。話があるから部屋で待つていてほしいと、入れ替わりに風呂へ向うリナに真剣な目つきと声で言われた。部屋で待つてくれつて言われてもなー。正直たつた一日で色々あり過ぎて疲れた。なんだか安心すると、思わず欠伸がもれる。近くにあつたマンガを取り、ベットに横になると、俺は目を瞑つた瞬間に寝てしまった。

「はあっ…はあっ…」

ひたすら俺は全力で走っていた。なぜこんなにも全速力で走っているのかわからない。ただわかるのは、逃げていることだけ。しかし、体の限界は既に来ていて、足はガタガタで左右にフラフラ。肺は酸素が足りないと、焼けるような痛みで悲鳴を上げる。それに加えて頭にも酸素が足りていないのか、ぼんやりとして考えることができない。そんな状態でやることは、わかることは、ただ一つ。『逃げる』今にも倒れそうな状態で長く走っていられることも無く、不意に体のバランスが左に片寄り倒れ、2回転ぐらいして止まる。何が追つてきていたのか確認するために、後ろを振り向くと

「…いじょ…ですか…大丈夫ですか？」

「…っはあ…はあっ…はあ…」

夢…か…。どうやらリナが起こしてくれたらしい。でも俺の心臓はさつきまで本当に走っていたかのように、激しく鼓動を打ち息も荒く、さらには手汗に寝汗。なんか凄い状態になつている。とりあえず落ち着けるために横になつて気を静めていると、頭上から言葉が降つてくる。

「大丈夫ですか？」

「ああ。だいじょ…リナ、近い」

目を開けたら、視界いっぱいにリナの顔。たぶん、俺の体の上に四つん這いにでもなつていてるのだらう。五〇cmくらい頭持ち上げたら確実にぶつかる。むしろ当たつてやうつかと考えて止める。

「大丈夫だから、一旦どいて…」

心配そうな顔をしつつも、夢中だつたのか意図的なのかわからないくらい近かつた顔が離れる。

「とりあえずシャワー浴びてくる。」

そう言つてリナを残して時々ふらつきながらも、一人浴室に向かう。あーくそ…なんで朝からこんなに疲れてんだ…。

シャワーを浴びて戻つてくると、リナが朝食を作つておいてくれていたのでそれを食べ、昨日聞けなかつた話をしてもらひ。ちなみに平日で授業があるのだが、仮病の演技を入れて電話をすると、あつさりと休むことを了承してくれた。

「昨日、あなたは生き返るチャンスをもらつてこの世界に来ましたね。ところで、今日どのよくな夢を見ましたか?」

俺は簡単に説明を、いや、一言だけ、逃げている夢だつたと云えた。

「逃げている…ですか。あなたにはこの世界に来たときから一つの能力をもらつてこるはずで、その夢はその力のヒントになるはずなのです。」

「力、か…例えばどんな?」

「私が知つてゐるのは身体的に現れるところとで、精神的にはほとんど出ないということも聞きました」

「身体的で、精神的にはほぼ出ないか。夢の内容は逃げていて、自分の足で逃げてるから能力はほぼ足で決定かな」

軽く整理して適当に考えた結果を少々早口に言い終えると、リナが少し驚いていた。

「え。どうしたの?」

「いえ…やけに頭が回るのですね。驚きました」

「一晩寝たら耐性ついたのかな。それに」

そこで一度言葉を切つて、リナの方を見て少し笑つて言つ。

「朝から美味しいの食べたから、目が覚めてるんだよ」

リナは料理が褒められたと気がつき、少しほほを赤くして照れている。でも、目が覚めた原因の七割ほどは、いきなりよくわからぬ悪夢?を見て、さらに一気にシャワーの蛇口をひねつたら全身に

冷水を…。自分の不注意にあきれつつも、よく目が覚めたんだ。とかもう絶対に言えない。

「あつ、少し話がずれましたね。それで、その力を使って戦うんです」

「え。戦うの？」

路地裏を見ればリンチとか見る町で生まれ育ったが、自分自身、人を殴つたことなんて一度も無い。そんな自分が戦闘か。…正直勝てる気がしない。そんなことよりも。

「何でそれを最初に言わないので…」

先に言われていれば、多少は心構えが違つたかもしれないのに。いや、やることには変わりがないのだけれども…。

「すみません…その時、私も頭真っ白で…それでも頑張つてたんですよ！あ、それでですね。はい。戦います。戦うんですけど、弁明を並べたかと思えば急に淡々と喋つたりナは、ただ…といきなり声を弱めた。

「ただ？」

「戦う相手がわからない上に、制限時間はこっちに来てから二日間。ですので、残り二日です」

二日という言葉に少し悲しくなる。なんだか余命宣告された人の気持ちがわかった気がする。悲しくなっていても、余命二日には変わりがない。

「…相手はどうしてもわからない？」

リナはうつむき、沈黙する。戦う相手がわからなくて、制限時間は残り二日。仮に相手がこの町に居ても、二日だとムリがあるな。特徴も何もないから探しようがないし。なら、話は簡単だ。

「よし。ムリだ」

情報が少なすぎる。無駄な努力は、極力避ける。それが俺のポリシー。

「ええ！？そんなにあつさりと…必ず一つは方法が…」

リナは俺のムリ宣言に、弱々しくも食い下がる。

「相手の特徴は？」

「あ…と再びリナは沈黙する。

「だろ？というわけで…リナ。行きたいとかある？」

遊園地に行きたいと言われ、俺たちは電車をいくつか乗り継ぎ、大型の遊園地まで来ていた。しかし、リナは行きたいと言っていた遊園地を田の前にしても、素直に喜んでいいのか迷っているようだった。それを見て一つため息をつき、リナの頭をわしゃわしゃと撫で回す。

「わっ！何するんですか？」

「せっかくここまできたのに迷ってるなよ。もう俺は、残り一日間遊びって決めたんだからさ」

それでもリナは、でも…とまだ迷う。ああ、もう…。

「そんなに迷つても時間は戻らないし、止まりもしない。ほら、時間がもったいない。行くよー」

そう言ってリナの後ろに回り、どうしても進もうとしない背中を押して進んだ。

始めは複雑そうにしていたリナもアトラクションに何度も乗ると楽しくなってきたようで、そのまま文字通り時間を忘れて遊びまくった。そして気がつけば、あたりは暗くなっていた。

「あ。結構暗いね」

「ほんとですね。建物が明るくて、気がつきませんでした」

ハツとして時間を見ると、いつの間にか九時過ぎ。今から夕食をとつても、終電に乗らなくとも大丈夫な計算になつた。

「そろそろ帰るよ。腹減ったし、食べてから電車乗ろうか。何が食べたい？」

リナは疲れを知らないのか、まだはっきりと元気な声で返事をし

てくれる。

「はいっ！ハンバーガーがいいです！」

「え。昼飯もそれだつたじやん。夕飯は変えよづか」

「えー…なら私が作ります」

「それは嬉しいけど、家に帰るまでに俺の腹がもたないから却下」  
「一回否定するとリナからブーブーと文句が飛んでくるが、それを  
軽くいなして考える。最近はパンと米ばかりだつたな。たまには  
麺類…パスタとかがいいな。伸びないし。そういうことで、どこに  
でもあるようなファミレスに入り、俺はタラコスパゲッティーを、  
リナはやっぱりハンバーガーを頼んだのだった。

行きと逆の道順をたどり、家まで歩いて三十分ほどになった。

「近くまでバスがあつたらよかつたんだけどね…」

「無いですか？」

「さすがにこんな時間まで走つてないからさ」

時間を確認すると十一時前。思っていたよりも、遅い時間になつ  
てしまつていた。

「そう…ですか。ふあ…」

朝からテンションが高くなつていたリナはさすがに元気が無く、  
眠そうに欠伸を一つ。そういう俺も、歩き詰めでさすがに足が疲れ  
た。今夜もよく眠れそうだと思いながら伸びをすると、リナを挟ん  
で一台の黒いワゴン車が止まり、ドアが開き手が伸びる。

「きやつ！？」

車内に突然リナが引きずり込まれ、車は発進する。車内からは助  
けて！と泣きそうなリナの声が聞こえた気がした。

「え、ちょつ！？」

いきなりのことによりパニックになりつつも、走り出した車を追いか  
け全力で走る。予想した力が足で当たりなら、止まるまで尾行する  
つもりだった。しかしくら全力で走つても、距離は詰まるどころ

かどんどん離れていく。そして、一つ角を曲がると完全に見失う。

「くつそ…！」

乱れた呼吸を整えつつも、思わず叱咤する。落ち着け、落ち着くんだ、冷静になれ、焦つたら負ける。この当たりの地理は頭に入っている。静かで人の来ない場所は… よし。とりあえずどんな車かは覚えているし、行くであろう場所の日星はついた。そして、後で必ず返すからと呟き、自転車を拝借して全速力で走り出す。

真っ先にここだと思った場所に向かっている時、横田に止まっている黒ワゴンを見かける。すぐに車内を確認するが、誰も居ない。周りを見ると、すぐ横に小さな廃墟があつた。俺の記憶では、ここには普通の民家が建っていたはず。これもきっと、リナの言つ『ずれ』なのだろうと思いビルに入らない。とりあえず、外から中の様子を伺う。マンガとかだと叫びながら突っ込むシーンだろうけど、そんなアホなことする気は無い。

『……！』

中からは三人くらいの声がした。内容はわからないけど、一つはリナだ。感情的になり突つ込みそうになる自分を理性で押さえ込み、先に警察に電話する。電話し終えて助けに行こうとするが、体が固まつた。少なくとも三人はいるであろう場所に、一人で突つ込むのか？たとえ一対一でも勝てる見込みゼロなのに…。それに待つても、十分くらいで警察が着てくれるはずだ。だから下手に刺激せずに、静観していても大丈夫なはず…。そんなことを考える。けれど、行かないといけない。合理的な考えが、自分の今までの生き方が、壁に、鎖になつて邪魔をする。そのジレンマに苦しんでいると、微かに声がした。耳を澄ます。どうやら裏口のドアを挟んで聞こえるようだ。

『…せ…一日だ…好きに生きないとな…』

最後がやけに大きな声だった。なんだか自暴自棄の人には巻き込ま

れたみたいだ。なんと迷惑な。しかし、これだと尚更ヤバイ。リナに何をされるかわからない状態で、俺は飛び出すことができない。

『何するんですか！』

『……！』

『……助けて……つー』

『……！』

その言葉に、行動を制限していた理性の鎖が千切れ。裏口のドアを蹴り壊し、その音で気がついたリナに迫っていた半裸の男を蹴り飛ばす。リナと転がっている男の間に入り、リナに逃げろとサンを送る。戸惑いながらも逃げていくのを肌で感じながら、男に向き直る。

「何してんだテメー！」

自分でも驚くくらい、低く黒い声だった。しかし、男は起き上がりながら不適な笑みを作る。理由はすぐにわかつた。ガラの悪そうな男が奥から三人入ってくる。さらに裏口から二人。しかも逃げたはずのリナを肩に担いでいた。

「ふふふ…抵抗したらその子がどうなつても知りませんよ？」

半裸の男が言い終える前に走り、掴みかかってくる三人の腕を自分でどう動いてるのかわからないが、すると避ける。

「黙れ変態」

そう小さく吐き捨て二発目の蹴りを浴びせる。が、そこまでだった。足を振りぬいて止まると同時に、三人に抑えつけられる。俺、格好悪い…。半裸の男は立ち上がり、かなり不機嫌そうに俺を見て踏みつける。

「そのガキは好きにしてください。その子は手足を縛ってこちらへ」  
そう言つて自由を奪われたりナをずるずると引っ張り、部屋から出て行く。ドアが閉まると同時に俺は殴られ、蹴られ、痛みで意識が遠くなる中、パトカーのサイレンを聞いた。

目が覚めるところは、無機質な白い天井が広がる病室だった。

「あれ。どうしたんだ、俺。何でこんなところに…」

そう思いながら起き上がりをするといふと、全身に痛みが走る。その痛みで前夜の事を思い出す。痛みを無視して起き上がると、ベットの傍らにリナがいた。リナはすやすやと気持ちよく寝ていて、目じりは少し赤くなっている。きっと心配で泣いていて、泣き疲れて寝たんだろうと思うと、少し微笑がこぼれてリナの頭を撫でる。撫でているとドアが開き医者…には見えない人が入ってきた。

「目を覚ましたかね？」

「ええ。でも、あなた…医者では無いですよね？」

医者なら白衣を着ているのが相場だ。でもこの老人は自分の身長ほどもある杖を持ち、白い服を着ているがそれはローブだった。

「ほつ。すぐ気がつくか。割と気がつかないものなのだがな」

まあ、だがそんなことはどうでもいいのじゃ。と付け加えて、そのおじいさんは前夜のその後と俺の状態とかを教えてくれた。あの後警察が来て男六人を逮捕して、倒れていた俺とリナは保護された。リナは俺が病院に搬送される時に、付き添うと言つて聞かなかつたそうだ。俺は全身打撲に肋骨の骨折らしい。現世に戻つたら全部直るそつだ。俺が拝借した自転車の持ち主に警察が行き、事情を聞いた持ち主は『その子は知り合いで、自転車は私が貸したんですよ』と笑顔で言つてくれたそうだ。俺はその言葉を聞いて、目じりが熱くなつて泣きそうになつた。と、そこまで言い終えたおじいさんは、少女の名前を呼び起し出す。

「ふあ…あ、おはよ「ひ」わいします…。あ、おじいちゃん」

「つむ。おはよつ。じゃがな、普段はおじいちゃんと呼ぶなどあれほど…」

「あ。すみません…おはよ「ひ」わいします、神様」

「どうやらリナのおじいちゃんらしい。て言つた神様？」

「神様？」

「いかにも。さて、お主がパンクする前に用件を言つたの。少年よ。

お前は見事試練をこなし、生き返るチャンスを得た。そこで、じゃ「考えたらパンクするのだとあえず全部信じることにして、一つ質問を。

「待つて。俺は何にも勝つてないよ？相手も知らなかつたし「相手は自分自身じやよ。屁理屈にしか聞こえないかも知れんが、一番ちよづどいいハードルは自分自身じやからな。よく三日間で出来たの。ほとんど合格したものはないのに」

こちらの意見をまったく言わせない威厳のあるしゃべり方で、こでじや、とおじこさんは付け加え、たっぷり一拍あけて爆弾発言をしてくれた。

「娘を預かつてくれぬか？」

「は？」

「だいぶお主に懐いていの様じやしの。それなり少年の世界に、現世に送りつと思つたのだが、スタートがビリしても傷つきやすいから」

リナ無視でがんがん会話が進む。むしろ、俺の都合とかも全部無視されている気がする。それでも思考がパーサークで止まりそうになるのをどうにか抑え、助けを求めてリナのほうを見ると、自分がどうなるのかわかっているのか黙つて俺の様子を静観していた。じーっと見つめられている。その目を見て、言葉が出なくなつた。そんな子猫みたいな目で見つめるな……。はあ……もつどうなつても知らね。

「…………そちらがいいのなら……ここですよ」  
「ふむ。決定じや」

久しぶりに田の前が真っ白に光る。そして、俺は電車事故の前の朝をまたやり直すのだった。あの子にまた会えると信じて。他に変わったことといえば一つ。

「兄さん！朝ですよー」

そう言って部屋のカーテンを開けてくれるリナ。一つ下の妹が出  
ました..。

## (後書き)

この作品はC79にPPー本として売りました。たまに出させていただい

たものです。  
もうひとつの行き詰っているし、せつかくだったのを投稿しました。

少しだらだらと話を。

最近やっとPS3を買っ、ずっとやりたかったACFAを買つた  
んです。

グラフィックいいよーすげーよー！全力でやつたら2時間で頭と  
(なぜか)肩が痛くなるくらい。頭はどちらかと言つと疲労感が多  
かったです。だって遠近法で小さくなつて敵が見えない。スペー  
ドが速すぎて自機は画面から逃げる。もちろん敵も速いから見失つ  
て見つけるのに一苦労。そら疲れるわな…。

まあ冬休みと言つのもあって1週間くらいやり込みました。現在  
6週目。時間を無駄に過ごしてゐるなーとか思いつつもやりました。  
きっとまだまだやるよー！

さて。つかみどりの無い本文に加え、こんな後書きまで読んで  
くださりありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0122q/>

睡魔を誘う暖かいとある朝

2011年1月9日14時25分発行